

本部だより

●第 37号



マーシャル方面遺族会

<http://mibfa1926.com>



携帯サイト

●発行日:平成30年2月1日 ●発行人:高林 芳夫
●本部:181-0012 東京都三鷹市上連雀8-7-8
●電話 & FAX:0422-77-8557 ●編集人:鈴木千春



全国戦没者追悼式・東京都の遺族代表として当会が献花



会員、会友の皆様、新年あけましておめでとうございます。お健やかに新しい年をお迎えの事とお慶び申し上げます。

当会は昭和38年の設立以来、今年で55年目を迎えます。昭和39年にアジアで初めて東京オリンピックが開催されました。そして二年後の2020年に、再び東京でオリンピックが開催されます。

半世紀の間に二度もオリンピックが開かれるこの日本の国力を、英霊もきっと喜んで見守っている事でしょう。

国も個人も、将来に目標がある事はいい事です。若人は大きな夢と希望に向かって、年配者は健康に気を付けて、オリンピックの開会式を迎えたいものです。

世界中の人々に、この美しい日本の国と、国民の心意気を見て頂きましょう。

皆様、今年もお元気で、そして希望に満ちた一年でありますよう心よりお祈り申し上げます。

平成30年度 慰霊祭、総会、直会のご案内

慰霊祭・総会を開催いたします。皆様

お誘い合わせの上、ご参加ください。

※本年は靖國神社の都合上、慰霊祭が昼からとなるため、総会を先に開催いたします。

■日時 平成30年4月1日(日)

■受付 参集殿前

午前9時より受付開始。

9時40分までに受付を済ませ、

2階「楠の間」でお待ちください。

さい。

■総会

午前10時～11時(予定) 総会

詳細は当日ご案内いたします。

■集合写真

午前11時～11時30分(予定)

総会終了後、同会場にて集合写真を撮影します。イスの準備等ご協力をお願いいたします。

■慰霊祭

12時より昇殿参拝

■直会旅行

一泊二日の箱根旅行を企画しました。

慰霊祭終了後、靖國神社からバスで出発します。参加人数により、移動がロ

マンスカーになる場合もあります。

・旅行代金 一名 25000円

※旅行の詳細は、お申し込みの方に、別途ご連絡をいたします。

会員親睦のため、振るってご参加下さい。 幹事・清水雅尚

●お願い

1. 慰霊祭 出欠はがき

同封の出欠はがきに必要事項をご記入の上(欠席の方も)、2月末日までに本部に届くよう、ご投函下さい。

2. お振り込み

同封の郵便振替用紙で2月末日までにお振込み下さい。

・年会費 3000円

・玉串料(慰霊祭参加者のみ)

一名 500円

・直会旅行代(ご希望者のみ)

一名 25000円

・寄付金(ご協力お願いいたします)

※当会は会員数が著しく減少しており、

会の運営は厳しさを増しております。

会報発行もHP管理も皆様からのご寄

付に支えられております。

何卒ご協力をよろしくお願いいたします。



■ 新役員紹介

次の二名の方に役員就任をお願い致しました。

山村 一郎様 愛媛県
佐藤 勉様 宮城県

会の発展のため、ご尽力頂きますようお願い、よろしくお願ひ致します。

平成30年度の役員は次の通りです。

名誉会長 朝香誠彦
相談役 大給乗龍

会長 高林芳夫
副会長 米林義昭

本部役員
山口良二
清水雅尚
石澤洋子

内海淑子
岡村勝利
小室洋子
佐藤知子
佐藤 勉
鈴木千春



会員の皆様のご協力をよろしくお願ひ致します。

本部事務局 米林美智子
会計監査 吉田正明
篤志会員 徳原徳子
安細和彦
中村順子
山村一郎

永代神楽祭

平成29年7月15日、靖國神社にて本会の永代神楽祭が斎行されました。

神官の祝詞奏上の後、笛、太鼓の演奏に合わせて巫女の舞が奉納されました。年ごとに境内は提灯の数も増え賑やかでした。
(中村順子)



*当会からの参加者(順不同・敬称略)
黒川 誠 福永弥生 米林義昭 米林美智子 内海淑子
中村秀夫 中村順子 高林芳夫 高林正子 佐藤知子
菅野四郎 小室貞男 小室洋子 吉田正明

全国戦没者追悼式

米林義昭

8月15日、72回目の終戦記念日を迎え、天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、日本武道館にて全国戦没者追悼式が挙行されました。

三権の長や、各界の代表者、各都道府県の遺族等、約六千二百名が参列し、正午の時報に合わせて黙祷が捧げられ、その後、陛下がお言葉を述べられました。

東京都の遺族代表として当会の会員である私が献花をさせていただきました。非常に栄誉なことで、改めて今後の日本の平和と、戦没者のみたまに深い祈りを捧げました。

※表紙写真をご覧下さい。

*当会からの参加者（順不同・敬称略）

高林芳夫 米林義昭 米林美智子

内海淑子 星野綾子 中村順子

間々田征史 間々田邦子

靖国神社秋季例大祭 高林芳夫

10月18日、靖国神社秋季例大祭が斎行

されました。当会を代表して参列いたしました。靖国神社にご縁のある関係者で、拜殿は人であふれておりました。

例年、国会議員が多数参列されますが、今年は丁度、国政選挙の最中で議員の姿は見られませんでした。式典は、國學院大學吹奏楽部の演奏に合せ、全員の国歌斉唱からはじまり、三献の儀まで滞りなく終了致しました。

※詳細はHPにも掲載しております。

黒川元会長ご逝去

元会長・黒川誠様が平成29年9月5日に、ご逝去されました。

品川区の安楽寺別院にてお通夜、告別式がしめやかに執り行われました。謹んでお悔やみ申し上げます。



故・黒川元会長を偲んで

山口 良二

黒川元会長がお亡くなりになりました。平成29年9月5日に旅立たれ、享年98歳でいらつしました。

黒川さんは平成9年に当会の副会長に、平成11年に会長にられました。その時すでに82歳、以来16年間にわたり、会長としての職務をまっとうされました。ご高齢ではありましたが、いつもお元気でした。

いくつか、当会でなされたことを思い出してみますと、一つ目は業務の簡素化です。それまで会は、女性スタッフを置いて事務処理をしていましたが、黒川さんはそれをせず、業務を大幅に簡素化して運営に当たられ、総務・経理事務など、自ら率先してなさっておられました。

二つ目は現地慰霊です。黒川会長時代は実に7回もの現地慰霊を実施しております。今ではすっかり定着した感があります。

三つ目はホームページの開設です。それにより、遺族会創設以来の会報「環礁」

など、貴重な資料や沢山の現地の写真が散逸すること無く、どなたでもすぐに見られるようになり、会務情報も発信可能になりました。

四つ目は靖国神社・遊就館で「写真展」を開催されたことです。それにより、多くの方にマーシャル諸島自体と、そこでどんな戦いがあったか、多くの戦死者が今も眠っていることを知っていただくことができました。



業績を数えればまだまだありますが、長きに亘り、会に尽くされた黒川さんに

感謝あるのみです。黒川さん、本当にありがとうございました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

寄付者ご芳名

(平成29年7月1日～10月末まで)

次の方よりご寄付をいただきました。

神奈川県 岡野智津子様

福島県 根本さとみ様

茨城県 鈴木やよひ様

栃木県 猪瀬康夫様

ありがとうございます。

心より感謝申し上げます。

訃報

東京都 石川 勲様

黒川 誠様

佐賀県 金子 茂様

愛媛県 兵頭義彦様

広島県 佐々木千鶴子様

謹んでご冥福をお祈りいたします。

ホームページの活用について

現在、皆様への情報提供の手段として会報「本部だより」とホームページ(以下、HP)の二つの方法があります。会報発行は年2回、約220部です。HPは4月から、更新回数とともに情報を増やしました。4月～10月までで、約3千のアクセス数がありました。

最新ニュースの見方は次の通りです。「マーシャル方面遺族会」で検索、トップページ↓左列上段の「ホーム」→「イントロダクション」のページの下部にスクロールして「インフォメーション」をご覧ください。

今後は、紙からネットの時代が変わっていきますので、HPを有効に活用したいと考えております。

会員間のコミュニケーションの場となりますよう、皆様からのお便りも掲載したいと思えます。どんな事でも結構です。会報のご感想、リクエストなど、事務局にお便りやメールをお寄せ下さい。

takabayashi.yoshio@khaki.pala.or.jp
※今後、HPを見やすく整理し、リニューアルなど検討します。

連載⑤最終回

未だに多くの戦友が眠る飢餓の孤島

ウオツゼ島

■筆者 吉田誠さん

(平成24年7月2日 91歳で逝去)

第二次世界大戦 私の戦争過去帳

総てを忘れないうちに克明に。戦友が多く眠る。戦争は勇ましい反面、悲惨である。史実に記す。

「昨日の敵は今日の友」

米軍上陸後、徐々に「昨日の敵」だった米軍から糧食ほか酒保物品の配給が開始された。タバコやキャラメル等、我々が現在知っているもの。酒は日本酒で(オレゴン州産)何か日本名がついた一升瓶であった。携帯食は日本のは相反し、充実内容で、AとBの2種類からなり、小型の乾パン、バター、チーズ、コンビーフ、チョコレート、ピーナツ、小型ビンにはブランデーウキスキー。戦闘中でも利用できるものばかりであった。当時朝鮮から徴用された施設部隊(一部アリラン隊)は全員コロロン島に移され

ていた。陸軍、海軍約3千名中、1074名が生存、370名の健常者を除き、歩行不可とか病弱者、殆どが栄養失調者と負傷者で、何とか生き残れた。又逃亡兵は2百を超え、その中には司令従兵もいた。

ウオツゼを去る日

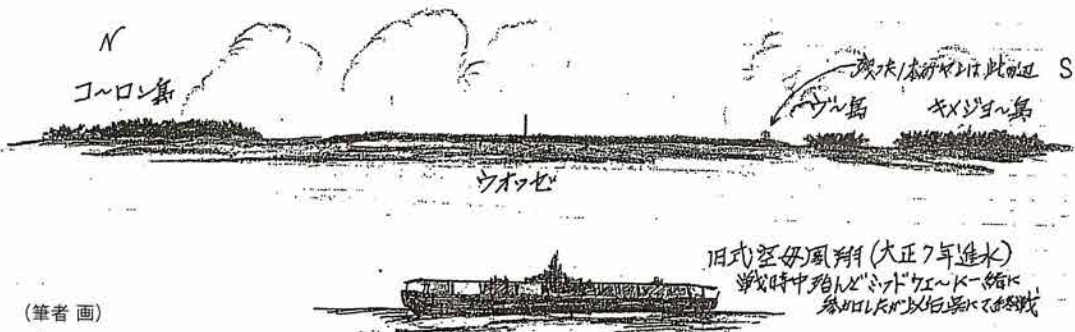
終戦から約2ヶ月、次第に体力も回復した。しかし戦争が終わったのに力尽き、当地で亡くなった兵は20数名あった。此の戦友は野火として故国に連れ帰った。又その遺骨は第一次引き揚げ船、病院船氷川丸で内地に、また栄養失調の重患者は米海軍飛行艇で、ハワイ海軍病院と米海軍基地(マジユロ旧日本海軍通信基地)に、との話であった。

第二次引き揚げ船は海防艦だった。これでほとんど終了したが、最後に残った健常者約370名は空母「鳳翔」で引き揚げ、その中に私が出た。月日は不明なるも、島の中央棧橋に集結。多分昼頃であったか? 米軍将校からチェックを受けたが非常に簡単なもので、こんなに簡単ならウオツゼの砂を持ち帰ったか?

た。その時、岸壁近くにあった施設の方々が「さようなら」その他言葉にできない罵声もおきていた。

鳳翔は環礁内中央に待っていた。米軍の船で鳳翔に乗艦「俺は生きて帰る。よかった」

甲板で、穏やかな島を眺めていると、何と表現して良いのか、亡くなられた戦友達を残して申し訳ない気持ちであった。



(筆者画)

横で鳥を見ていた兵士が「南岬に椰子が1本残っている」と言った。あの緑の島に残った1本。私も見た。又航空隊の鉄塔のみ残っていた。

午後、艦は静かに滑り出した。1人で目礼した時の涙は、誰にも見られないようににした。

やがてトートン水道から外海に出る頃は小さな島になっていた。鳳翔の乗組員から「ご苦労さまでした」と声をかけられたが、当時は複雑な心境だった。

約1週間の航海で浦賀に上陸

10月10日浦賀に上陸できた。もうすっかり夜であった。内火艇らしい小艇に分散し、棧橋に上陸。その時多分、日赤の看護婦か？4、5人から頭から背中まで何か不明の粉をかけられた。もちろん消毒剤であると知りながらその後DDTであることを知った。その時ある婦人が「大塚は帰ってきましたでしょうか？」との言葉を聞いた。第六砲台長の奥さんだろう、誰かが言っていた。「隊が違うのでわかりません」と私の耳は聞いていた。やがて整列約1時間半、暗い夜道を海

軍通信学校に向かった。宿舎までの途中、懐かしいタバコの赤い看板が、その二階から子供達が（暗い電灯だった）「兵隊さんおかえりなさい」と手を振ってくれた。何か急にジーンと来てしまった涙がでてしまったが他の者も同じであったろう。

宿舎で1年半ぶりに入浴した。各人に日本酒1合、酒の飲めないものは虎屋の羊羹が配給。早々と翌日、各自が故郷に向かった。

途中、野宿もあるかとその故郷の遠近により、配給は米1合、粉味噌、粉醤油少々。他に毛布1枚、半長靴その他、であった。

戦後の所感とこれから

人生は貧乏してもよい。とにかく一生懸命に生きることである。奉仕の心を忘れずに、生きている間に何をすべきか、である。

私たちはこれからの日本の為にな何をすべきか？ 私の考えは、皆で国を愛し、世界の国々と仲良く、であり、他は何もない。国を愛し、礼節を守り、お互いに

助け合う。

もうひとつは教育の改革である。それは汗を流す教育であり、現在の点数教育は反対である。学力は必要であるが、人生は努力しての実力社会を夢みている。現在の社会は一体どうなっているのだろうか。金、銀、茶髪の日、筋肉の何も無い鶴の脚。

これから少子高齢化、お互いに助け合う人生、これが大切である。

そして日本は属国から脱して完全な、日本独立国に。現在は独立国家ではなく、属国そのものである。

（おわり）

※大井和子さんよりご提供いただいた手記は、会報29号から連載され、途中何度かお休みもありましたが、今回が最終回です。読みやすいように編集した部分がありましたことをお断りしておきます。

著者は他界されましたが、ウオッセ島がどういふ飢餓状態であったか、貴重な手記を残されました。心より御礼申し上げます。

戦争関連資料

本部だより36号にて、戦争に関する資料提供をお願いしましたところ、皆様から貴重な資料をお送りいただきました。

●福島県 佐藤敬義様より

太平洋戦争証言シリーズ「6」

「丸別冊 玉砕の島々」

（中部太平洋戦記）

●埼玉県 橋本強様より

「戦時日誌（控）」

自昭和16年9月 至昭和19年10月

「第4海軍施設部（ミレー島）」

第5301隊」

●神奈川県 石澤洋子様より

〈太平洋戦争秘話〉

「知られざる第50号駆潜艇の航跡」

著者 川副克己

〈続太平洋戦争秘話〉

「海軍病院船・朝日丸の運命」

著者 川副克己

ご寄贈ありがとうございます。

※引き続き、戦争関連の資料でしたらど

んなものでも結構です。先人が戦った歴史が埋もれてしまわないよう、事務局へのご寄贈をよろしく願っています。

「現地慰霊」実現までの奇跡

—徳原徳子さんを囲んで—

鈴木千春

ハワイ在住の篤志会員・徳原徳子様の来日に合わせ、10月9日、都内でお話をお聞きしました。昭和5年生まれ87歳とは思えない若々しさに驚きました。70歳からパソコンを覚え自在に使いこなし、



体力維持にジムに通い、毎回300m泳いでいらつしやる、という徳子さん。若さの秘訣は、旺盛なチャレンジ精神だと感服しました。（ご主人は他界され、現在はお一人住まいだそうです）

当会の歩みを知る「生き証人」の徳子さんに貴重なお話を伺いました。当会とのご縁は、遡ること約50年前。それは「一通の手紙」から始まった、奇跡の物語でした。

昭和30年代、丸の内の外資企業に勤務していた徳子さんは、外国へ行くチャンスを探していました。自分の可能性を試すため、昭和40年に単身マジュロに渡ります。

「海外ならどこでもよかったです。たまたま知人がマジュロの会社を紹介してくれました。しばらくすると会社から『歓迎します』という通知が届き、日本を飛び出しました」。マジュロには飛行機で行き、マニラ、グアムと乗り継ぎ4日かかったとのこと。島では日本人の若い女性は初めてなので珍しがられ、一躍有名人になったそうです。

一方、日本では、遺族会ができたのが昭和38年。政府に「現地に慰霊碑を建ててくれ」と依頼してもラチがあかない。

「自分たちで直接交渉しよう」と当時の常任幹事、浮田さんがクエゼリンの米軍司令部に直接手紙を出しました。しばらくして「慰霊碑を建てていい」と返事がきて会員一同、喜びに湧きます。が、現地の事情を調査したくともルートがなく全然わからない。どう情報収集すればいいのか模索していたところ、「マーシャルを往復している貨物船が横浜にいる」と聞き、浮田さんは港に行き、その外国人船長に事情を話しました。船長から「マジユロに山田徳子さん（徳子さんの旧姓）という日本人女性がいる」と聞き、わらにもすがる想いで手紙を書き、船長に託しました。一か月後、徳子さんの手元に届きます。

「マジユロで船長から手紙をもらったのですが、浮田さんという全然面識のない方からでした」

マーシャルに遺骨収集と慰霊に行きたいが、全く情報がないから教えてほしい、という内容だった。

「全然知らない男性ですし、年齢も不明。事情が本当かどうか不明なので、はじめは信用しなかった。でも本当だったら気の毒だと思い、聞かれたことだけ返事しました。それでとても喜んでくれて、ご縁が始まりました。昭和41年のことです」。

当時、日本とマーシャル間の貨物船は、片道一か月かかりました。船長に手紙を託してから、お返事の到着まで一か月後かなと思っていたら、約10日で航空便で返事が届き、一同びつくり！そして文通が始まります。

「それから半年後、昭和42年に浮田さんと佐竹さん（遺族会幹事）が、マジユロに来られたんです。マーシャルの各島をまわって遺骨収集しておられ、私は社長から「お手伝いできることがあれば、してきなさい」と言われ、喜んで同行しました。玉碎の島、タラワ、マキン（ブタリタリ）、オーシャン島、ナウル。何もない島で、赤道直下の大変暑いところ。遺骨を収容し、祭壇を作り、慰霊祭には現地の人も参加し、若い人も手を合わせていました。島の人達はとても友好

的でした」。

マジユロに約3年暮らした徳子さんは、結婚を機に移転します。

「私は昭和43年に、ハワイ生まれの日系人・徳原勇と結婚しました。夫はクエゼリンで働いていました。私は当時、日本国籍だったのでクエゼリンには住めず、イバイ島に移り住みました。一番戦死者が多いのでクエゼリンに慰霊碑を建てたいという会の思いは知っていました。が、日本人は入れない島です」

徳子さんのご主人・徳原さんが個人的なツテで、現地司令官に遺族会の思いを伝えてくれました。

昭和43年、日本国内では慰霊碑の製作が進んでいました。しかし、船便で碑を送ることができても、現地で誰が建てるのが問題です。日本人の入域が許されないため、建てるべき日本人がいないのです。

そこで遺族会は「慰霊碑を司令官宛にプレゼントする形」にして慰霊碑の資材一式と仕様書を船便で送りました。受け取った司令官は碑、書面、図面一式を徳原さんに渡し、「貴方が責任者となって

慰霊碑を組み立てて下さい」との指示をされました。クレーンや工具などは軍のもの使ってもいい、ただし日当はないボランティアという条件です。

「主人が建設のリーダーになり、友達を集めてボランティアで慰霊碑を建てることになりました。日系2世の方々、現地の方々、人種の違う各国のいろんな方々が協力してくれました。みんな仕事が終わるの作業です。16時に仕事が終わるのですが、まだすごく暑い時間です。建設場所は島の一番端で夜は真っ暗、明かりがない場所。暗くなって見えなくなるまで作業してくれました。土日を使って来てくれる人もいました」

徳原さんによると、ボランティアは（日によって人数は変わるが）だいたい6、7人で皆、民間人。軍人はいませんでした。徳原さんご夫妻が中心となって仕様書を見ながら、整地、組立作業のすべてを何日もかかって作業してくださいました。専門職がない中、基礎工事、木枠、コンクリートを流して乾くまで何日も、次は木枠を取って慰霊碑を水平に保つことがすごく難しかった、とのこと。

「シャベルで掘ると骨がどんどん出てきました。骨は白いものだと思っていたら、枯れ木のような茶色い骨でした。一か所に集めて埋めて、その上に仕様書通りに砂利を敷いて碑を建てました」。

徳子さん毎日立ち会っては記録写真を撮り、設営の様子を日本に報告してくれました。しかも、現地では現像ができないので、アメリカ本国にフィルムを送り、プリントされたものが返送され、それを浮田さんに送る、という時間と手間のかかることを引き受けてくださいました。

かくして、昭和43年慰霊碑は完成され、その後の碑の維持管理にもご協力くださいました。

お話を聞きながら、思わず徳原さんに「イヤになりませんか？」と尋ねると、「全然！思ったこともありませんが、みんな楽しそうでしたし、友人同士だから自由だった。建設現場近くの飯場みたいなところで冷蔵庫があつて、作業を終えた後、みんなでおしゃべりしながら冷えた飲み物を飲むのが最高の楽しみでした。女はおしゃべりと言いますが、

男のほうがおしゃべりよ」と微笑みました。クエゼリンの赤い鳥居のことを伺うと「日系人の大工さんが造ってくれたんです。お名前は忘れませんでした。その上にペンキで赤く塗って『日本人墓地』と書いてくれた人はペンキ屋さんで日系2世の稲福さんという方です」。



念願の慰霊碑がクエゼリンに建った、次は現地慰霊に行けないだろうか、と、肉親を失った遺族としては考えたくありません。他の戦地には、どんどん慰霊巡拝で遺児がお参りに行っていた時代です。再び徳原さんご夫妻のおかげで奇跡が

起きます。

慰霊碑ができて間もなくの頃、徳原さんが、司令官とパーティーの席で、「日本の遺族はお参りに来たがつていますよ、せっかく慰霊碑が建ったから、見たいと思えますよ」と訴えてくれました。

パーティーでの会話、信頼の厚い徳原さんの申し出に司令官は、日本人遺族の受け入れを許諾しました。正式なルートでの申請なら通らなかつたと思います。徳原さんのご人徳で、現地慰霊が許された瞬間でした。

昭和50年の慰霊参拝36名、最初のグループはハワイ経由でクエゼリンに。そのときは飛行機が着いて燃料補給の間、45分間だけです。たとえ、司令官の許可があつても、当時はそのくらい規制が厳しく、日本人を滞在させてくれませんでした。

一行は飛行機を下りると、バスに乗って慰霊碑の場所まで向かい、45分以内で空港に戻らないといけません。あまりに短い滞在時間でした。

しかし、その後、規制はだんだん緩やかになっていったそうです。

「なぜそうなつたか、これは主人の想像ですが、墓参の方々の礼儀正しき、規則を守る真面目さに、米軍側が好感をもつたのではないかと思います、皆さん謙虚でしたし」。

現在では、当たり前のように基地内の宿舎に泊まることができ、島内をバスで回ることが出来ます。しかし、これは決して当たり前ではなく、ここに至るまでのきつかけはすべて徳原さんご夫妻のおかげです。

マーシャル以外の戦地では、慰霊参拝するのにこんな苦労はありません。

しかし、当時の遺族の強い思いが一通の手紙となり、唯一人、現地にいらした徳子さんに届きました。手紙から始まり、慰霊碑の建立、現地慰霊の許諾まで、その恩恵は、現在まで続いています。

「皆様とのファーストコンタクトは私ですが、その後、日系人の徳原と結婚し、主人が慰霊碑を建て、主人が慰霊参拝を交渉し、ずっとつながっている感じがします。遺族会とは運命的なものを感じています。遺族会の方々との関わり

は、私の人生で半分以上を占めています。浮田さん、佐竹さんとの出会いも運命みたいなものですね。実際に私がお手伝したのは、ほんのちよつとなのに、日本に来るたび、このように歓迎してもらえて嬉しいですよ」。

55年前にこの会が始まり、当時の会員の熱い思いと、現地での多大な支援を下さつた徳原さんご夫妻のおかげで、こんにちの会があります。

細い糸をつないで、思いを積み重ねて、一歩ずつ、歩みを進めてきた会なんだな、と噛みしめた日でした。

※当会HPの「ドキュメント」で、昭和40年代の会報「環礁」を全て見ることが出来ます。

創立当時の会員の切なる思い、慰霊碑製作の苦労など、会の歴史が詰まっています。

※若い世代に読んでいただきたい記事です。

環礁4号―司令官からの手紙

環礁5号―慰霊碑デザイン・経費

環礁6号―慰霊碑許可実現の経緯

環礁7号―現地派遣報告

環礁8号―慰霊碑製作始まる

環礁9号―慰霊碑完成、徳原さんのこと

環礁10号―慰霊碑・現地に建立

など、続きます。是非ご覧下さい。



若々しい徳原さん



第一ホテル両国のレストランにて



25階(最上階)からの眺め



徳原さんを囲んで、再会を約束